



Title	戸田聡編訳 『砂漠に引きこもった人々』 (教文館 二〇一六年)
Author(s)	矢内, 義顕
Citation	基督教學, 52, 33-36
Issue Date	2017-07-07
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/70089">http://hdl.handle.net/2115/70089</a>
Type	other
File Information	03yauchi.pdf



[Instructions for use](#)

# 『砂漠に引きこもった人々』

戸田聡「編訳」(教文館 二〇一六年)

矢内義顕

三世紀の末、ローマ帝国によるキリスト教迫害が終息へと向かい、殉教への可能性が閉ざされていく中で、殉教に代わる個人的な救済の道を、過酷な禁欲・錬成の生活に求める人びとが、エジプトの砂漠さらにはパレスティナ、シリアに登場する。彼らは、ささやかな手仕事で糧を得ながら、詩編を中心とした聖書の朗読と祈りの生活に専心する。そして四世紀には、こうした隠修生活のみならず、パコミオス(二九二―三四六年)による上エジプトのタベンネシを中心地とした共住型の修道生活も始まる。修道生活が一つの社会的現象となる。今日もさまざまな形態で続く修道制の成立である。この成立を解明するために不可欠の文書が、女性も含む修道者たち

の伝記・列伝、彼らの金言集(『砂漠の師父の言葉』谷隆一郎・岩倉さやか訳、知泉書館、二〇〇四年)、そしてカイサリアのエウセビオス、ソクラテス、ソズメノスなどの『教会史』である。

『砂漠に引きこもった人々』という、やや刺激的な表題をもつ本書は、修道生活の創始者と言われるアントニオス(三五六年没)を中心とした最初期の修道士五人の伝記を収録する。ヒエロニムス『テバイのパウルス伝』、アタナシオス『アントニオス伝』、ヒエロニムス『ヒラリオン伝』、同『囚われの修道士マルクス伝』そして著者不明『エジプト人マカロウス伝』(ギリシア語版)である。以下、各文書について簡単に紹介する。

『テバイのパウルス伝』は、アウグステイヌスと同時代人であり、聖書のラテン語訳と共に聖書註解を残し、また三七四年から数年シリアのカルキス近郊で修道生活を体験したヒエロニムス(三四七―四一九年)が、三七〇年代の後半に執筆したものである。彼は、このテバイのパウルスをアントニオスに先立って修道生活を開いた最初の人物として描く(一章)。ただし、

その実在性は疑われており、訳者も同様の見解をもつ。しかし、その文学的な価値が損なわれるものではない。

アレクサンドリア主教・神学者アタナシオス（二九六頃―三七三年）が三六〇年前後に執筆した『アントニオス伝』は、最も読まれた、影響をもった修道士・聖人伝の一つである。本書のラテン語版はすでに小高毅によって翻訳されているが（上智大学中世思想研究所監修『中世思想原典集成1初期ギリシア教父』平凡社、一九九五年所収）、ギリシア語版からは初訳である。全体の構成は、プロローグに続いて、アントニオスの出生から始まり、時間的な順序に沿って彼の霊的な成長を語る第一部（一―四八章）、癒しなどの奇跡を語る第二部（四九―八八章）、彼の死を描く第三部（八九―九二章）そしてエピローグとなっている（二八七頁参照）。アントニオスが、両親の死後、教会でマタイによる福音書一九章二一節の朗読を聞き、財産を棄て修道生活を志す場面（二―三章）、絵画などで取り上げられる悪魔の誘惑との闘いの場面（五―九章など）は有名だが、一六―四三章および七四―八〇章で語られるアントニオスの説教は、

『砂漠の師父の言葉』に収録される彼の言葉と共に、初期修道制の思想を知るためにも重要であろう。

つぎに『ヒラリオン伝』および『囚われの修道士マルクス伝』だが、著者ヒエロニムスに従うと、ヒラリオンは、「アントニオスの後継者」（二二章、二章も参照）で、パレスティナにおける修道生活の「創始者」（九章および一五章も参照）である。しかし、彼は遍歴する修道士でもあり、六三歳の時にパレスティナを後にし、エジプト、リビア、シチリア、ダルマティアのエピダウロス、そして最後はキプロスで没する（二〇―三三章）。『囚われの修道士マルクス伝』は、ヒエロニムスが「友人である主教エウアグリオス」（二章）から伝え聞いたことを記したものである。シリア人マルクスは、若い時にイシュマエル人に捕らえられ、奴隷とされたうえに、同じ奴隷仲間の女性と無理やり結婚させられるが、貞潔を守り、二人で逃亡し、シリアのアンティオキアから三十マイルほど離れた小村で修道生活を送る。このマルクスは、他の三人と異なりアントニオスとの関係もなく、この伝記が本書に収録された理由は定かではない。

シリアの初期修道生活の一端を示す物語だからであろうか。なお、この二つの伝記には、四世紀のサラセン人に關する記述もあり、興味深い（『ヒラリオン伝』一六章、『マルクス伝』四、八章）。

本書に収録された五つの伝記のうち、『アントニオス伝』について大きなものが『エジプト人マカリオス』である。マカリオス（三九〇年没）は、スケーティスの砂漠における修道生活を創始した人物であり、『師父たちの言葉』にも彼の言葉が多く収録され、その伝記もコプト語（九世紀）、シリア語、アラビア語、エチオピア語そしてギリシア語（一一世紀末頃に成立）で伝えられている。本書に収録された『マカリオス伝』は、訳者自身が校訂したギリシア語版によるものである（二九五頁参照）。このテキストは、フランス語で出版された著書および「エジプト人マカリオス伝」ギリシア語版 校訂・翻訳と註釈」（『人文・自然研究』一橋大学教育研究開発センター、二〇〇七年、二六五―四一三頁）で参照することができる。『マカリオス伝』の構成は『アントニオス伝』とほぼ同じである。ただし、復活に関する一

連の議論はあるもの（三七―四〇章）、『アントニオス伝』のような、まとまった説教を見いだすことはできない。

本書で描かれる初期の修道士たち、とりわけアントニオスの修道生活は、以後の修道士たちの模範となることは、言うまでもない。五二九年、イタリアのモンテ・カッシーノに修道院を創立し、西欧の共住修道制の基礎を据えたヌルシアのベネディクトゥスが著したとされる『戒律』は、最後の章で修道生活の完成を急ぐ者たちが読むべき書物の中に「師父たちの伝記」を挙げる（七三・五）。それゆえ、本書に収録された伝記は、西欧の修道院の靈性をも育み、またそこから生み出される数多くの修道院文学にも多大の影響を及ぼすことになるのである。

古典語で書かれた文書を、現代の日本の読者に平明で読みやすい訳文で伝えることは決して簡単なことではない。本書の訳文は、訳者独特の言い回しはあるものの、それを十分に果たしていると思われる。ただし、「アプローチ」（四八頁）、「ハンスト」（一五九頁小見出し）、

「パートナー」(二四五頁)等は、多少の違和感をもつ。

本書の意義は、何よりも初期修道制を解明するための貴重な史料の信頼できる翻訳を提供したことにある。だが、本書を学問的に読み込むためには、訳者の『キリスト教修道制の成立』(創文社、二〇〇八年)、『エジプト人マカリオス伝』をめぐる諸考察―歴史と文学伝承の関係―(『オリエント』48―1、2005年所収)などの論文を読まざるをえない。訳者自身が弁明・お詫びを述べてはいるが(二九六頁)、もう少し(一般の)読者も配慮した「解説」と「訳注」が必要だったのではないかと思う。とはいえ、ベネディクトゥスに従えば、本書を「霊的な読書」(lectio divina)のための書物とすることもできよう。いずれにしても、本書の出版されたことを心から喜びたい。それと同時に、初期修道制を知るための重要な文書である著者不明の『エジプトの修道士列伝』(四世紀末)、パラディオス『ラウソスに献じるキリスト者列伝』(四二〇年頃)なども翻訳・出版されることを期待したい。